

紙季折々

しき*ありあり

日本製紙グループ

環境・社会コミュニケーション誌

Vol.9

未来のための森づくり

古来より森林は私たちにあって、身近な存在でした。ときには様々な生物の営みを支える場所として、ときには生活を支える木材などの資源を供給してくれる場所として、多くの恩恵を私たちに与えてくれました。しかし、森林は今や世界規模で失われつつあります。十年後、百年後の未来に向けて、大切な森林を守り、育むために。今号では森づくりについて考えていきます。



◎その土地本来の森を再生する宮脇方式

本来その土地に生育していた原植生(原生林など)は都市の開発などで、人間の管理を必要とする代償植生に様変わりしました。宮脇先生は、人間活動の影響が無かったと仮定した場合にその土地に生えていると推測される植生(潜在自然植生)を回復させる森づくりを進めています。



原生林は地球上にほとんど残されていない

◎土地本来の森づくりのメリットとは

その土地に適した土地本来の森は、成長も早く、しっかりと根付くため、土砂災害から人を守ります。また、維持管理の手間がかからない上、失われた植生の回復は生態系の多様性の回復につながります。

潜在自然植生による成長推移



◎世界に広がる宮脇方式

宮脇方式の森づくりは、世界各地に広がっています。ケニアにて環境分野で初のノーベル平和賞を受賞したワンガリ・マータイさんと植樹に取り組んだほか、中国、マレーシア、ブラジル、オーストラリアで植樹活動を実施しています。



今回、宮脇先生の潜在自然植生理論と実践に触れる貴重な機会を得ましたが、学んだ点を生かしながら、当社グループの環境に配慮した森林経営をさらに発展させていきます。



植樹の様子

今回の植樹は、タスマニア州政府により、タスマニアの森林管理を進展させ、森林資源の経済的な有効活用と保護育成を実現する取り組みとして行われました。宮脇先生が行った事前調査で、本来は広く自生していると考えられるノトファグス(南極ブナ)の生育域が狭まっており、人間活動の影響でユーカリの生育域が大幅に広がっていることが判明。ノトファグスの植樹により、潜在自然植生の回復を目指しました。

日本製紙グループでは、「森林資源の保護育成を推進する」という環境憲章の基本方針に基づき、森林認証の取得など環境に配慮した森林経営を実施しています。また、守るべきと判断した森林は環境林に設定するなど保全活動を行ってきました。

宮脇先生の森づくりへの参加
潜在自然植生による森づくりを体験して

2008年12月、宮脇先生の潜在自然植生理論に基づいた植樹がタスマニア(オーストラリア)で実施され、日本製紙グループは3名の社員を派遣し、このタスマニアの土地本来の森を回復する取り組みに参加しました。

コラム1 森林が私たちに与えてくれる恩恵

森林が私たちに与えてくれる様々な恩恵は、森林の多面的機能と呼ばれています。森林の多面的機能のうち金額換算できるものを合計した森林の評価額は、毎年70兆円にも及ぶと試算されています(日本学術審議会答申)。

<p>生命を育む</p>	<p>土砂災害を防止</p>	<p>温暖化の防止</p>
<p>水源涵養</p>	<p>資源の供給</p>	<p>レクリエーション</p>
<p>その他の機能</p> <p>土壌保全、雪崩防止、防風、気候緩和、大気浄化、騒音防止、景観、文化など</p>		

森の恩恵を理解し、緑を増やす

森林保全の重要性が叫ばれる現代において、いまだに九州2つ分(730万ha)に相当する森林が農地開拓などにより毎年失われています。様々な恩恵を与えてくれる貴重な緑(コラム1参照)。その緑を未来に残していくには、森林の減少を食い止め、新たに緑を増やすことが重要です。そのような状況の中、身近なところから緑化を進める自治体や学校、企業による植樹活動が広がりをを見せてきました。しかしその一方で、一部の緑化活動の弊害も指摘されています。植樹後に適切な管理が行われず最終的に荒れてしまった植林や、緑化のために導入された外来種が土地本来の植物の生育場所を奪ってしまった事例など、良かれと思つたことがむしろ負の影響を与えることもあり、正しい知識を持った上での緑化活動が求められています。

森づくりの考え方

さて、森づくりの弊害も指摘される中、いったいどのような森づくりをするべきなのでしょう？一言に森といっても、その種類は様々。ここでは森づくりのポイントを整理します。

①目的を持った森づくり

森が与えてくれる様々な恩恵のうち、どの恩恵を重視するのか、森づくりの目的を明らかにすることが第一歩です。土砂災害の防止であれば根を深く張り巡らせる木、植生の回復であればその土地本来の木、資源の供給であれば私たちの生活に有用な木など、目的に合わせた樹種選択が重要です。

②持続可能な森づくり

その土地の生育条件に適さず枯れてしまうような植樹は論外ですが、スギやヒノキなどの人工林や、里

③生物の多様性に配慮した森づくり

山に見られるクヌギやコナラなどの雑木林は、人が手を入れないと荒廃します。そのような森をつくる場合、植樹後の管理を考慮した森づくりが必要です。また、その土地本来のものでない木を植樹する場合、在来の植物の生態に悪影響を与えないなど生物多様性の視点からの配慮が欠かせません。

森づくりのスペシャリスト・宮脇先生

さて、「世界中に3000万本の木を植えた男」として知られる森づくりのスペシャリストが日本にいることをご存知でしょうか？その人は横浜国立大学の宮脇昭・名誉教授。森林生態学の世界的第一人者です。国内外1600箇所以上で植樹を実施し、木を植え続けてきた宮脇先生ですが、81歳になる今も、現役として世界中で植樹活動を行われています(裏面インタビュー参照)。

宮脇先生の行う森づくりの目的は「人と地球の未来を守る」こと。災害から人々を守り、温暖化の防止に貢献し、様々な生物の住み処となるように、未来のために木を植え続けています。そのために行われる植樹方法は、宮脇方式と言われるその土地本来の森づくりです。その土地の生育環境に適した潜在自然植生(コラム2参照)の主木を植えることにより、生育が比較的早く、維持管理に手間がかからない持続可能な森づくりが可能になります。また、関東以西の潜在自然植生であるシイ・タブ・カシ類などの照葉樹は根がまっすぐ深くまで伸びるため、災害にも強い森となり私たちの命を守ります。

動物は消費者であり、植物が唯一の生産者なんです。

世界中に3,000万本の木を植え、命に謙虚になることの大切さを訴え続けている宮脇昭先生にお話をうかがいました。

巷間、百年来の経済危機だと大騒ぎしていますが、地球の40億年近くの前を見れば何百回もビッグバンと言われるような大変動、大危機があったわけですね。それを鑑みれば危機でもなんでもない。紙切れの札束や株券がどこかに偏っていようと、何億の人が死んだわけじゃない。一番大事な命です。死んだものは絶対に生き返らせることは出来ない。世界で一番幸福なことは生きているということ。これはまさに宇宙の奇跡なんです。40億年近く前に、何億とある星の中でたったひとつ地球だけに原初の命が生まれ、その遺伝子が消えずに続いてきているから今日のあなたがあり、私がある。紙切れも大事ですよ(笑)。でもやはり、我々が未来へ残すものは札束ではなく、あなたとあなたの愛する人の遺伝子なんです。

かけがえのないあなたの遺伝子の緑の揺りかごが、ふるさとの木によるふるさとの森です。その土地本来の森があまりに少なくなっている。地球規模でも原生林なんて残ってない。アマゾン、アフリカ、シベリアの奥地まで調査してますけどね。日本においても、日本人の90%以上が住んでいる照葉樹林地帯では、その土地にあるべきホンモノの森が0.06%しか残っていません。だから、人間に破壊されたところはせめて百倍くらいに戻してやらないといけない。百倍にしても6%です。土地本来の森以外のところは田んぼも畑も都市もつくらないといけないし、紙もつくらないといけないから全部を自然の森として残すのは無理です。

地球温暖化の抑制に省エネが叫ばれていますが、我々は電気も車も使わないと生きていけません。もちろん、それを抑えることも

大事ですが、それだけだといくらやっても引き算なんです。足元から木を植えて、足し算しましょう。

木を植えるところがないとは言わせませんよ。2本植えれば林、3本植えれば森。5本植えれば森林ですよ。1億2千万人の日本国民が、67億人の地球人が3本、5本と植えればどれだけの森がつかれるのか。遠くの話をするよりも、足元から自分の命を、文化を、遺伝子を守るための未来志向の森づくりが大事なんです。木材生産、あるいは都市の美的なものも大事ですが、未来志向で木を植えるというのは、かけがえのない命と地域に根ざした文化をつくるということです。40億年続いた地球上の遺伝子を守るために、たとえば景気がどうであろうと、木を植えていかなきゃいけない。

森は芝生の30倍の緑の表面積があります。防音機能も、空気の浄化も、水質保全も、集塵機能も、全部30倍。森がある限り、紙にしよう、焼かなければ、カーボンを閉じ込めているわけです。だから、森をつくり、積極的に焼かずに、使い切って、再生産する。それが一番賢明でしょう。あれもダメ、これもダメ、何も使うなって言ったら生きていけませんよ。人が地球にとって一番の害虫だから、人が消えれば千年くらいで元に戻ります。でも、我々が消えていなくなったら困るから、生き残るためにどのように森を残し、守り、つくっていくか。

今から取り組んで間に合うのか、間に合わないのかとジャーナリストがよく質問してくるけど、そんな問題じゃない。間に合わせないといけないんです。地球の命のドラマは、あなたが、私が、人間が主人公なんですから。



PROFILE

みやわき・あきら

1928年岡山県生まれ。広島文理科大学生物学科卒業。ドイツ国立植生園研究所で潜在自然植生理論を学び、横浜国立大学教授、国際生態学会会長などを経て、現在は横浜国立大学名誉教授、財団法人地球環境戦略研究機関国際生態学センター長。日本全国の植生を徹底的に現地調査して全十巻にまとめた『日本植生誌』(至文堂)で1990年度朝日賞受賞。1992年紫綬褒章受賞。2000年勲二等瑞宝章受賞。2006年には日本国籍者としては初めて環境国際賞「ブループラネット賞」を受賞。主な著書に『鎮守の森』『木を植えよ!』(新潮社)、『いのちを守るドングリの森』(集英社新書)、『いのちの森を生む』(日本放送出版協会)、『森は地球のたからもの』(ゆまに書房)などがある。

ケニアで植林に取り組み宮脇先生



環境・社会活動カレンダー [2009年2月~4月]

- 2月5日 ロン・ティボー国際音楽コンクール ガラ・コンサートに特別協賛
- 3月4日 国立遺伝学研究所に残された貴重な桜の苗木を日本製紙の技術で育成し、三島市の小学校で植樹
- 3月21~22日 第3回豊野「森と紙のなかよし学校」を開催

編集後記

81歳になる今でも、世界中を飛び回って植樹を行い、あと30年は木を植え続けると語る宮脇先生。今回、タスマニアの植樹に同行させていただきましたが、その行動力に圧倒されました。森に行けば植生を調べ、人が周りにいれば丁寧に解説し、植樹においては指導から実際の植え付けまで行い、誰よりも動き、誰よりも話し、休む暇もありません。

そのタスマニアからは、年の瀬も迫った12月21日に日本に戻ってきましたが、宮脇先生は空港に一泊しただけで、翌日台湾に向かって出発。地球の緑を増やそうとするその思いが、宮脇方式の植樹活動を世界に広めるパワーになっていると実感しました。(笹間)

お問い合わせ先

株式会社日本製紙グループ本社 CSR本部 CSR部 〒100-0003 東京都千代田区一ツ橋1-2-2 TEL: 03-6665-1447
ホームページ: <http://www.np-g.com/inquire/> (お問い合わせ) <http://www.np-g.com/appliform/> (資料請求)



みんなで止めよう温暖化

チーム・マイナス6%